2022 年度　神戸教区神学塾（信徒の神学）№.３

―　聖書をどう読むか　　物語と考古学　―

司祭 フランシス　小林史明

（序）今年の後半はユダヤ暦５７８３年、日本は紀元２６８２年？

私の書斎には、ユダヤ教のカレンダーがあり、今年の９月２６日がユダヤ暦の５７８３年の新年（ローシュ・ハシャナー）と書かれています。ローシュは頭。ハシャナーは定冠詞ハに年を表わすシャナ―がついて、年の頭、つまりお正月ですね。これは神様が世界を造られたと言われる、西暦換算で紀元前 3761 年 10 月７日を創世紀元とする暦です。

一方、私の住んでいる教会から北へ１０分ほど歩くと、オロン坂という、神武天皇がまだ若者の頃、そぞろ歩きしていた所と言われる坂があり、そこを進むと皇宮屋（こぐや）と言われる神社があります。ここで後に初代天皇になる若者（イワレビコノミコト）一家が暮らしていた、として神社が建ち、近くには、皇軍発祥の碑というのが建っています。ここから神武天皇になる若者と仲間たちが、ヤマトを目指して挙兵し、宮崎県日向市の美々津の港から船に乗って瀬戸内海、紀伊半島を回って三重県熊野に上陸したと言われています。そして足が３本あるハ咫烏（ヤタガラス）に導かれて現在の奈良県橿原市で初代天皇（神武天皇）になった、と言われています。天皇の即位は、西暦の紀元前６６０年ということになります。

旧約の話は皆さんご存じでしょうから、日本神話の話を少しすると、世界を造ったイザナキノミコトから、アマテラス（太陽の神）が生まれ、その孫、瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）が８人の神様を引き連れて、地上に降りてきました。これを天孫降臨と言います。その場所が高千穂ですが、それが２か所あるのです。宮崎県と鹿児島県。瓊瓊杵尊の子どもに海幸彦と山幸彦がいて、山幸彦の孫が神武天皇です。そして現在の天皇まで１２６代続いています。どこまでが神様で、どこからが人間なのか、などの疑問も持ちますが、神武天皇は１３７歳で亡くなったそうです。イザナキとイザナミが世界を造ったのも、ユダヤ暦同様、そんなに古い時代を想定していないように思えます。

日本の歴史を調べて面白く解説する加治将一という歴史作家がいます。彼によると、７２０年にできた日本書紀という書物は、それまで不安定だった天皇の立場を正当化するた

めに書かれたものだそうです。中国の書物に「日本」という言葉が出てくるのは７０２年が初めてで、そして「天皇」という言葉も６７０年が初めて、ということでした。天皇という言葉は、中国の皇帝に対抗するために作られた言葉らしく、我が国でも「日本」や「天皇」という言葉も、それまでは別の名称だったろうと言われています。ですから、それより１３００年以上前に神武天皇が奈良で即位した、という話も、当時の文献があるわけでもないし、史実としては疑わしいのです。

（１）聖書の話はどこまで史実としてさかのぼれるか？

現代の科学は、世界の始まり「ビッグバン」が起きたのは１３８億年余り前の出来事だと説明しており、現代人である私たちは、ユダヤ暦や日本の神話などをそのまま史実として信じることはできません。しかし、聖書はイエス様の時代まで続いているわけですから、先ずどこまで史実としてさかのぼれるか、というのは気になるところです。そしてそれ以前の話として記述された物語を私たちはどう受け止めたらいいか、単なる作り話ではない、納得のいく理解をして聖書を読まなければならないでしょう。

（２）最近までの創世記についての理解

私の神学生時代の１９８０年代前半、創世記の１章（天地創造）から１１章（バベルの塔）までは、原初史と言い、世界と人類の始まりを創作した物語であり他の国でもよくある話と言われていました。１２章のアブラハムからはイスラエルの先祖たちの歴史的な話として理解していました。イスラエルの先祖アブラハムはバベルの塔のあったメソポタミア地方から旅して、現在イスラエル共和国があるカナンへ移り住んだのだろうと、そして本当に飢饉が原因かどうかはわからないが、エジプトに移住することになったのだと漠然と考えていました。

（３）西のエジプトと東のバビロンで奴隷生活をしていたと思っていた

ですから、旧約聖書の歴史を説明するのに、もともと、東のメソポタミア地方に住んでいたアブラハムが、旅をしてカナンの地（現在のイスラエル共和国）に住みつき、その子孫は、一度は西のエジプトで奴隷になり、そこから脱出してカナンに帰って、ダビデが王国を建てた。しかしまた国が滅ぼされて、東のメソポタミア地方のバビロニアの都バビロンで奴隷になった。それをペルシャ（現在のイラン）のキュロスという王様が解放してく

れて、またカナンの地に帰ってきた。つまり、イスラエル民族は、西と東に一度ずつ奴隷時代があったが、そこから解放され自由の民になる、というのが聖書の教えであり歴史であると説明していました。聖書をそのまま読めば、このような受け止めになるのです。

（4）最近の考古学研究による衝撃

私は、２０１６年から日本の神話の舞台である宮崎に住んで、日本の天皇家はどこまで歴史的にはさかのぼれるのか、という素朴な疑問がわきましたが、それ以上にクリスチャンである私は、聖書の記述は史実と創作物語とを区別することに、関心が向きました。

２年前、新型コロナウイルスが蔓延し始めた頃、外出するのを控えるようになって、ついついパソコンでいろんな動画を見ているうちに、２００８年アメリカの放送局が制作した「旧約聖書の埋もれた秘密」(The Bible's Buried Secrets)という番組を見て、衝撃を受けました。

聖書では、アブラハムの孫であるヤコブにはイスラエルという新しい名前が与えられます。彼は１２人の息子たちと一緒にエジプトに住み、やがてイスラエルの１２部族と言われることになってくるのですが、イスラエル民族がエジプトに住んでいた、ということは、ずっと後にまとめられた聖書に書かれているだけで、考古学的資料がないのです。そして、エジプトで歴史上最古の「イスラエル」という言葉が出てくる資料は、現在エジプトのカイロ考古学博物館に保管されている、紀元前１２０８年に作られたメルエンプタハというエジプト王の戦績碑文だそうです（次頁に掲載）。エジプトの王が東の国へ戦争に行った時の記録の中に、次のような記事があります。

『カナンはあらゆる災いをもって征服され、アシュケロンは連れ去られた。ゲゼルは捕らわれの身となり、ヤムノンは無に帰した。<u>イスラエルは子孫（ないし「種」）を断たれ、</u>フルはエジプトのために寡婦とされた』

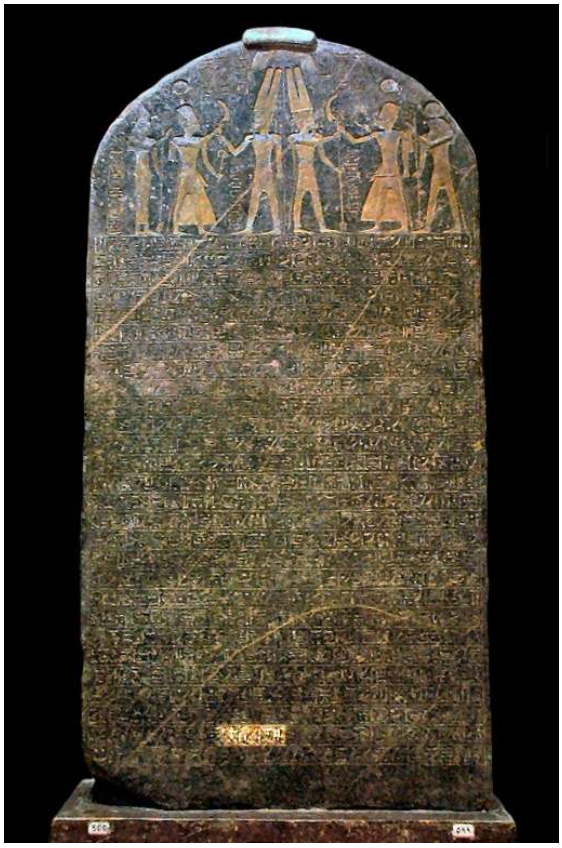
ところが、番組のナレーションは次のように説明していました。

「しかし、子孫は絶えませんでした。この戦勝碑は世界舞台に、ある民族の登場を証明したのです。イスラエルの民です。」

そして、碑の横に立って説明する学者は次のように言います。

「これらはイスラエル民族が存在したゆるぎない証拠です。その場所は山地となる南カナンの地であります。」

碑文の日付は西暦にして紀元前１２０８年にあたります。



メルエンプタハの碑文（カイロ博物館）
下の色の違う部分にイスラエルの文字

（５）イスラエルはどこから来たのか

エジプトには、碑文の中で東の民族名としてイスラエルという言葉が出て来るだけで、エジプトにイスラエル人がいた、という証拠がないのです。男だけでも６０万人がエジプトを脱出したという出エジプトの出来事（出エ１２・３７）はどうなったのでしょうか。こんな大事件が事実ではないとすれば、モーセの後継者であるヨシュアやイスラエルの人々のカナン侵入を描いたヨシュア記や士師記の出来事はどうなのでしょう。

映画「十戒」でモーセの敵であるエジプト王、ユル・ブリンナーが演じたラメセスⅡ世の治世は紀元前１２９０年～１２２４年ということなので、聖書をそのまま信じたら、その治世にエジプトを脱出したイスラエル人たちは、ヨシュアによって、－１２５０年～１２２５年頃にはカナンに定住し、デボラ、ギデオン、エフタ、サムソンなどの士師の時代（－１２２５年～１０２０年）、彼らは各地にイスラエルの部族の指導者として住んでいた、という話になるのですが、考古学的にはどうなのでしょう。

（６）カナン定住には、伝統的に二つの説、ところが新しい説が登場

ヨシュア記ではヨシュアによってイスラエル人たちがカナンを占領したことになっていますが、士師記では、各部族は周りのカナン人と共存したり、争ったりしています。それで、伝統的な見解のひとつは、「軍事征服説」と言って、ヨシュア記の通り、カナンの諸都市をイスラエルの民が征服したという見解があります。一方「平和浸透説」と言って、最初は、イスラエルの民は人口のまばらな山地や丘陵地に住みはじめ、時間をかけて、徐々にカナン地方に定住していった、という説があります。士師記に描かれた、多くの士師たちの活躍は、平和浸透説に近いだろうと言われています。

ヨシュアがエリコの町を取り囲んで、城壁を１週間、毎日行進して、最後にラッパの音とともに城壁が壊れて、街を占領した話（ヨシュア記６章）は、「ジェリコの戦い」という歌にもなって有名です。確かに古い町であるエリコには城壁が崩れた痕跡もあるのですが、城壁の崩壊はヨシュアの時代よりだいぶ古い時代に起こったことで、ヨシュアの時代にはもうその町は存在せず、痕跡を残すだけだった、ということが分かってきました。

そんな中で、カナン地方の一番大きな町ハツォルが滅んだのは、エジプトの碑文の時代とほぼ一致しました。ところがその町の遺跡には、戦争で破壊された痕跡がないのです。エジプト軍が来たわけではなさそうです。そしておもしろいことには、この町の金持ちたちが住んでいた地域の土台を形成する石は高熱によってボロボロになっていることがわかってきました。これは外敵のしわざではなく、抑圧されていた貧しいカナン人たちによる反乱で、焼き払われたのではないか。そしてその貧しい人たちは、この町を捨てて、東の山地や丘陵地に住んだのではないか、ということが言われてきました。これが「イスラエル起源説」あるいは「引き上げ説」と言われている最近注目の説です。

この説によると、カナンの都市国家は階層社会であったが、支配層による抑圧に苦しむ「貧農層」は、平原の裕福な階層の支配から東にある丘陵地に「引き上げ」、同じ神信仰により、平等な共同体を形成させた。それがイスラエルの最初の社会であった。イスラエル社会は都市の貴族社会に対する貧農層の「反乱」によって成立したというわけです。そしてそれを裏付けるように、彼らの形成した共同体の遺跡からは、それまでのカナン人が使っていた土器類などと同じような形をしたものが発掘されており、カナン文化との連続性があります。しかも都市のものよりも簡素なものだったので、この人達は外部から移住してきた新しい民族とは考えにくいのです。つまり、イスラエル民族というのは、アブラハムがメソポタミアあたりから移住してきたという伝統的な民族起源ではなく、同じカナン人であったが、抑圧を嫌って、平等な人間社会を目指したのが、イスラエルという民族の起源ではないか。その信仰意識を確認し、独自の生活をするために創世記や出エジプト記などの物語が形成されていった、と考えるのが自然ではないか、というわけです。その平等な共同体には、エジプトの奴隷生活から逃亡を図ってカナンへ戻ってきた少数の人々もいただろうが、彼らはイスラエル人ではなく、戦争で捕虜になったカナン人だったのではないか。そしてその逃走中、九死に一生を得たような体験があって、その話が膨らみ、次第に大きな奇跡物語が作られるようになったと考えられる、というのです。

（7）では聖書の人物はどこまでさかのぼれるのか

この新たな説が有力となると、イスラエル民族の原型は、カナン地方に住む、それぞれ多くの伝統を持った雑多な背景の人々が、支配者階級の人々に別れを告げて、山地や丘陵地に平等な社会を作ったということになります。ですから、アブラハムも、モーセも、ヨシュアも、後の時代の創作になる。そして聖書の人物として考古学的な裏付けのあるのは、どうやら紀元前１０００年頃のダビデ王くらいまでということらしいのです。

１９９３年、イスラエルの北部ダンという場所で発掘調査をしていたら、イスラエルの北隣り、ダマスカスの王が作った石碑に、イスラエル人を倒したという記述が出てきたのです。

『私は幾千もの戦車や騎手を有する屈強な王を殺した。ダビデー族を根絶やしにした。』と書かれていたのです。「ダビデー族」という言葉は重大な発見です。ダビデが実在した証拠となるからです。

（8）聖書は読者にわかりやすい仕方で書かれている

聖書考古学の本を読んでいると、面白いたとえが出てきました。聖書の場面を描いた絵の中には、しばしばその登場人物の着ている服装は、聖書の時代のものではなく、画家の生きていた時代の服装をしているものが多くあります。紀元前１０００年頃のダビデ王が、ルネサンス時代の服装で描かれているのも見たことがあるでしょう。絵は当時の鑑賞者にわかりやすいように描いたのです。そして、この点、文学としての聖書も同様で、それぞれの物語はまずその書物が書かれた当時の読者にわかりやすいように記述されていて、そこに託された教訓やメッセージも当時の読者に対して向けられたものだというのです。

（9）アブラハムの時代には、らくだは家畜ではなかった

創世記２４章には、年老いたアブラハムが息子のイサクの嫁を見つけるために、僕（しもべ、おそらく創１５：２のエリエゼルだろうと、ユダヤ人の子ども向けの本には出てきます。）を自分の故郷のナホルの町に遣わし、リベカを嫁にする話があります。この時、僕はらくだ１０頭を連れて高価な贈り物を持って出かけます。そして井戸のある所に来ると、娘のひとりに『どうか、水がめを傾けて、飲ませてください』と頼んだ時、その娘が『どうぞ、お飲みください。らくだにも飲ませてあげましょう』と言うなら、その娘が神

様の選ばれたイサクの妻だということにさせてください、と僕は祈りました。そしてそのとおりにリベカが答え、僕だけでなく、おそらく、らくだ１頭に５０～８０リットル必要な水を、その 10 倍、１０頭分も何度も井戸から瓶に入れて飲ませたのでしょう。

ところが、アブラハムが生きていたと想定される紀元前 2000 年～1700 年頃には、らくだは家畜ではありませんでした。家畜、それも荷物を運ぶ仕事をするようになったのは、紀元前 1200 年以降のことだ、と考古学などでは認められているのです。このお話は、ダビデが王様になって以降（つまり紀元前 1000 年以降）に編纂されたものなので、イスラエルの偉大な４人の母たち（サラ、リベカ、レア、ラケル）を称賛するために、聖書の編纂当時、家畜としてどこにでもいる身近な動物を取り上げ、読み手にわかるように、らくだへの水汲みの話ができあがったのだろう、と解説するのです。

つまり、アブラハムたちがカナンへ移り住んだというお話も、モーセが大勢の人々をエジプトのファラオの支配から逃れる出来事も、カナンからイスラエルの丘陵地へ「引き上げ」た人々が昔から口伝えに話された物語を、後世の人々がある目的のために脚色して編集したのではないか、という考えが浮上してきたのです。

（１０）民族の神話は、民族をまとめる目的のため

ある民族に神話ができあがるのは、民族を一つにまとめる、という目的のためだと歴史学者たちは言います。江戸時代の終わり頃、日本に多くの外国の船がやってきて、開国を迫りました。そして明治になると、それまで日本各地にそれぞれ藩を形成して、世襲制で運営されていたものを、廃藩置県と言って、政府の役人がそれぞれの県の知事に任命されていきました。それは、欧米の国々が東南アジアの諸地域を植民地にしている、ということに危機感を持った政府が日本を一つの国に統一する必要を感じたからです。そして、明治の新政府は、政治体制だけでなく、精神的な統一も目指して、将軍中心の国家から、天皇を中心とする政治にするように計画して行ったのです。日本に住む人々は、天皇に忠実な国民にならなければならない、ということで、天皇の権威を高めるために、天皇を天の神の子孫とする『古事記』や『日本書紀』の神話を使って、日本古来の神道を柱とする国家神道を唱え始めたのです。そして、『古事記』や『日本書紀』という８世紀にできた書物自体も、実はそれまで各地にあった神話、特に有名な出雲神話や日向神話などを取り込んで、大和朝廷を頂点とする国家体制のために編集して作られたと言われています。

（１１）聖書は成立まで複雑な歴史をたどった

ただ、聖書の場合はちょっと事情が複雑です。最初はみんなが平等な社会を創りたかったのですが、周りのカナンの部族にはそれぞれ強力な軍隊を率いた王様がいて、イスラエルを脅かします。戦争に負けると、勝った部族の文化や宗教を強要されるので、イスラエルの人たちも強力な軍隊を持ちたい、と預言者サムエルに要求します（サムエル記上８章）。サムエルは、王が人を支配すると人々が泣きをみることになる、と忠告しますが、民衆の要求を呑んでサウルを王にします。その後ダビデやソロモンは、自分たちの国の統一のために聖書の編集を命じますが、戦争のため、聖書編集に十分な余裕はありませんでした。また、周りの宗教の影響もあり、国民の間には偶像礼拝の伝統は残っていました。

イスラエルがその信仰を確立したのは、王国が成立した時ではなく、国が破れた時でした。東にあるメソポタミアから、アッシリアという国が攻めてきて、イスラエルの北半分が滅ぼされ、その後で起こったバビロニアが、イスラエルの南半分も滅ぼします。

（１２）国の分裂、滅亡とバビロン捕囚

少し遡って、国が分裂したことを話さなければなりません。紀元前１０００年頃ダビデによって統一された王国は紀元前９２２年、ダビデ王の孫レハブアムが王に就任した時、イスラエルの１２部族のうち、ユダ族とベニヤミン族が一緒になってエルサレムを都とする「南ユダ王国」として残ります。二つの部族の内、ユダ族が有力であったため、このように呼ばれます。そして残りの１０部族は、ダビデの子ソロモンの家来だった有力者ヤロブアムを中心に反乱が起きて「北イスラエル王国」と言われるようになりました。

この北の王国は、約２００年でアッシリアに滅ぼされます。そして民族の伝統は消えていった、と南ユダ王国は北イスラエル王国を批判します。しかし、北の都サマリアを中心にして伝統を守っている人々は「サマリア人」と言われるようになって、イエス様の時代にも、「善いサマリア人」（ルカ１０章参照）の話として語られますし、現代においても、ゲリジム山という、サマリアの町の郊外にある場所で、春には彼ら独自の過ぎ越しの祭りが行われています。（ヨハネ４章の「イエスとサマリアの女」の話に北の伝統が見られます。）

北イスラエル王国がアッシリアによって滅ぼされた時、北の伝統を持って南ユダ王国に合流した人々もいました。そして北が滅んでから１３０年余りで南ユダ王国もバビロニアに滅ぼされ、イスラエルの指導者たちはバビロニアの首都バビロンに捕囚となって、こ

こで５０年間奴隷としての生活をするのです。そしてこの捕囚期間が終わって、故郷に帰った頃から、南ユダ王国に属する者だったので、自分たちを「ユダヤ人」と呼ぶようになったのです。

（１３）バビロン捕囚の頃から聖書の編集が始まった

古代の宗教は、国同士が戦って負けた国は、勝った国の神様の方が強い、ということで自分たちの信仰を捨てるのが常識でした。そして、元々支配者からの独立によって自分たちの信仰共同体を立ち上げたイスラエルも、バビロン捕囚までに、外敵の恐怖のため、王国を建ちあげ、人が人を支配する社会を容認しました。その結果北も南も滅ぼされる、という苦い経験をしたのでした。国土を失い、王も、神殿もなくしたイスラエルの民は、信仰を失いかける危機的状況でしたが、口伝えで語られてきたモーセたちがエジプトから解放された物語に希望を見出し、故郷に帰る望みを語ったのでした。

この出エジプトの物語は、北イスラエル王国に伝えられてきた伝承だと言われています。それが南ユダ王国にも伝わって、バビロン捕囚の頃には、バビロニアに移されたユダヤ人たち全体の希望の物語になったようです。彼らは敗戦国の捕虜でありながら、神様のことを、単なる自分たち民族を保護する神様ではなく、もっと大きな神様のイメージを描くようになりました。自分たちがバビロニアに負けたのは、神様が弱いからではない。自分たちが神様との約束を守らず、人が人を支配する社会を創ってしまった罪の結果である。そして神様は世界全体を創造された唯一の神様だという一神教が確立されたのです。

この時代に読まれた詩編１３７編は有名です。

1 バビロンの流れのほとりに座り／シオンを思って、わたしたちは泣いた。
2 竪琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。
3 わたしたちを捕囚にした民が／歌をうたえと言うから／わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして／「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。
4 どうして歌うことができようか／主のための歌を、異教の地で。
5 エルサレムよ／もしも、わたしがあなたを忘れるなら／わたしの右手はなえるがよい。
6 わたしの舌は上顎にはり付くがよい／もしも、あなたを思わぬときがあるなら／もしも、エルサレムを／わたしの最大の喜びとしないなら。

（あとは略）
現在の聖歌集で顕現節の歌になっている１１６番ですが、同じメロディーで、古今聖歌集４３番では、２節目にこの詩編の内容が今の歌詞よりはっきりと歌われています。
ははなるサレムよ　とわのみやこよ　バビロンのかわべに　いまなげくとも
やがては　つどいて　ハレルヤ　うたわん

実は、ヘブライ語では「バビロン」のことを「バベル」と呼んでいます。創世記１１章のバベルの塔の話は、捕囚の時代に、支配都市のバビロン批判としてできあがったお話ではないかという説もあります。このような背景からモーセ五書は誕生したと思われます。
バビロニアに代わってペルシャがバビロンを支配するようになり、ペルシャの王キュロスが捕囚釈放を布告すると、人々はエルサレムに帰って神殿を再建。城壁も修復されて、総督ネヘミヤや祭司であり書記官であるエズラらの活躍で、エルサレムの町が復活したのでした。そしてエズラは、バビロンの捕囚時代にまとめられていたモーセの律法（モーセ五書つまり創世記から申命記）を人々に、夜明けから正午まで読み上げたと言われています。（ネヘミヤ記８章参照）。

しかし、旧約聖書が３９巻として正式に正典と認められるのは、イエス様の昇天より後の紀元９０年、地中海沿岸の町ヤムニアでの会議です。それまでモーセ五書や預言書などは広く読まれていましたが、各書は巻物であって、一冊の本ではありませんでした。

（１４）近代において、民族の独立を促した「カレワラ」について

聖書に載っている昔の伝説や歌が、人々の独立心や支配者からの解放を促すきっかけになっていることを感じていただきたいのですが、１９世紀から２０世紀にかけて、文学や音楽が国の独立運動に大変大きな役割を演じてきた、おもしろい例を紹介します。
北ヨーロッパにフィンランドという国があります。「サンタクロースの国」という印象がありますが、今年になって『フィンランドはなぜ「世界一幸せな国」になったのか』（岩竹美加子著・幻冬舎新書）という本が出て、「５年連続幸福度№１」と帯に書かれています。この国は、１１世紀にキリスト教を広めようとする北方十字軍により、スウェーデンに占領されました。それから７００年の間スウェーデン王国に支配され、公的行政や教育はスウェーデン語で行われ、フィンランド語はたんなる民衆の言葉にすぎませんでし

た。ところが、１８０９年にスウェーデンはロシアと戦って敗れたため、フィンランド全体が、今度はロシア帝国の領土になってしまったのです。

その頃から、自分の国の言葉が大切であることが知識人たちに認識され、地方で歌い語られてきた民間の伝承詩が注目されるようになりました。農村では以前から農民詩人により物語を述べる叙事詩や心情を歌う抒情詩が作り出され、うたいつがれていました。

そこで１９世紀の前半、医師のエリアス・リョンロートはフィンランドの東にあるカレリア地方の農村を訪ね歩いて、それらの歌を１８３５年に『カレワラ』という本にまとめました。「カレワラ」とは「カレワという部族の勇士たちの国」という意味です。その後、１８４９年に改訂版が出て、外国にも翻訳されて大きな反響がありました。ドイツのヘンデルという思想家は「叙事詩を持っているということは独自の文化を備えていることになるから、国民としての資格がある」と褒めたたえました。フィンランド人にも自分たちがこのような立派な文化的遺産を所有していることの誇りと喜びが沸き上がりました。こうして人々の間に独立の機運がたかまり、ついに１９１７年にフィンランドはロシアからの自主独立を勝ち取りました。

５０章からなるこの本は膨大ですが、フィンランドのたくさんの物語や詩をリョンロートはうまく集めて、キリスト教国という背景から、民衆にわかりやすく内容を編集しました。第１章は、大気の乙女による天地創造。そして彼女から生まれたワイナミョイネンという不滅の詩人が主人公で、いろんな人物と出会いながら、話が展開してゆきます。恋愛あり、決闘ありの物語ですが、第７章で主人公が隣の国へ旅の途中で傷を負います。助けてくれた女性から「なぜ泣いていたのかね？ワイナミョイネン、あの忌まわしい場所で、海に面した岸辺で」と問いかけると彼は「異国の人の間では、何を食べても無駄なこと。人は自分の国でこそ暮らしよく、故郷でこそ偉いのだ。とにかく自分の国へ戻りたい」と言います。

私はこの「カレワラ」の中の、このワイナミョイネンの言葉を読んで、詩編１３７編の「バビロンの川辺でなげく」ユダヤ人の望郷の思いに通じるものを感じました。

このカレワラの最後、第５０章では、優雅でまじめなマリヤッタという少女がコケモモを摘みに行って、妊娠し、やがて出産。この子はカレリアの王となり、すべての国家の守護者として認められた。それまで主役だったワイナミョイネンは静かに外国へ去ります。

天地創造から始まった物語は、マリヤとイエスの登場を暗示するような結末で終ります。キリスト教の聖書を背後に感じながらも、このフィンランド独自の文化を伝えるカレ

ワラは、音楽の世界にも大きく貢献しました。フィンランドの生んだ世界的作曲家ジャン・シベリウスは、『フィンランディア』 という交響詩を１９世紀末に発表しました。
　７楽章からなるこの交響詩は、２楽章では、「ワイナミョイネンの歌」というのがあり、最後の７楽章では「フィンランドは目覚める」という独立を促すような歌で終ります。この曲は世界的にも大変有名になり、フィンランド賛歌として歌われています。実は私たちの聖歌集にも、２９１番「やすかれ　わがこころよ」として入っているのですが、どうしてこれが「葬送の式」の歌に分類されてしまっているのか。讃美歌などでは「信頼」「苦難と慰め」に分類されています。原曲は、生きる力がわく、夜明け歌です。

　元のシベリウスの交響詩の歌詞を紹介すると
　１おお、スオミ（フィンランド国民の自称）
　汝の夜は明け行く　　闇夜の脅威は消え去り
　輝ける朝にヒバリは歌う　　それはまさに天空の歌
　夜の力は朝の光にかき消され　汝は夜明けを迎える　祖国よ

　２おお、立ち上がれスオミ　高く掲げよ
　　偉大なる記憶に満ちた汝の頭を　おお立ち上がれスオミ
　　汝は世に示した　　隷属のくびきを断ち切り
　　抑圧に屈しなかった汝の姿を　汝の夜は明けた　祖国よ

　旧約聖書が、「人間が人間を支配する」という社会構造に反旗を翻して、イスラエル民族を成立させ、唯一の神様のもとの平等を唱えてきたように、１９世紀から２０世紀、そして現在も、人々の解放のために福音があることを覚えたいのです。

　第２回目のテキストで、ネラン神父の、「教会は、生きているキリストへ導く組織なのだ。」という言葉を引用しました。教会は信徒がキリストの弟子として成長するための組織であって、信徒を支配し、献金を巻き上げる組織ではない。真理はあなたたちを自由にする（ヨハネ８：３２）。このようなフィンランドの独立にも聖書は貢献していると私は思うのです。次回は新約聖書について解説します。イエス様の生き方と、たとえ話を考えなおしたいと考えています。